2017 年 10 月 10 日発行

日本音楽学会

東日本支部通信 第 46 号

MSJ East Japan Chapter Newsletter No.46

第 46 回定例研究会報告

日時：2017 年 9 月 9 日（土）13 時半～17 時半
場所：東京大学　駒場キャンパス 18 号館コラボレーションルーム 1
内容：シンポジウム（企画：駒場ヴォイス・スタディーズ研究会、コーディネーター：堀内彩虹）
『歌声研究の現在と今後の展開可能性　――自然／文化の境界的なものとしての声に着目して――』

【パネルディスカッション１：声とパフォーマンス】
司会：岡野 宏（東京大学）
パネリスト：
新田孝行（早稲田大学オペラ／音楽劇研究所）「現代オペラ演出における歌声と人物の関係」
堀内彩虹（東京大学）「身体的違和感を〈きく〉― 歌声聴取の 新たなかたち」
子安ゆかり（武蔵野音楽大学）「歌手とピアニストのアンサンブルにおける 声の相互聴取のメカニズム」
岡野真裕（立命館大学、ゲスト）「歌声への運動科学的アプローチにおける困難」

【パネルディスカッション２：声と技術】
司会：堀内彩虹（東京大学）
パネリスト：
白井史人（日本学術振興会）「歌声の視聴覚的構成 ― オペラ・ミュージカル映画におけるその劇的機能」
岡野 宏（東京大学）「機械としての 「声帯」 ― 「エオリアン・ハープ」との 類比的理解をめぐって」
秋本径人（米山文明 呼吸と発声研究会、ゲスト）「声の視覚化―音カメラを使用した発声の伝播方式の映像化に関する研究」

コメンテーター：長木誠司（東京大学）

開催趣旨

堀内 彩虹（東日本支部）

本シンポジウムは、歌声を対象とした研究の現状を人文学および自然科学の両面から紹介した上で、歌声研究の今後の広がりとその意義について、自然／文化の境界としての声という観点から討議するものである。具体的には、歌声が、一方では身体に根付いた生得的な音であり、「自然」なものであるとみなされるが、他方では楽音として発せられるべく、社会的環境の影響を受けた音であり、「文化」的なものであるとみなされる、境界的な存在である点に着目する。

西洋音楽の文脈において歌声はこれまで、器楽／声楽の分類の下、楽器による音に対して、生身の人間による音楽として認識されてきた。ゆえに、人間の身体そのものあるいはそれに付随する生命的「自然さ」と結びつけて語られることがしばしばある。しかし一方では、歌声が楽音の一つとして提示され、音楽という文化的文脈において機能するという社会的かつ文化的側面ももつ。さらにいえば、歌声に対してある種の「自然さ」を見出そうとする立場、すなわち解剖学的あるいは生理学的まなざしを向け、歌声に人間の生得

的な質を見出そうとする態度そのものが文化的であるともいえる。

歌声のこうした境界性は、学問における声の扱いと無関係ではないのではないだろうか。すなわち、解剖学、医学、生理学といった自然科学分野において声がもつ身体的事実や機能が明らかになるにつれ、発声の生得的な側面が強調され、さらには歌うという行為が含みもつ生命的役割さえも指摘されてきた。その一方で、人文学において声は、「自然さ」をまとう音として扱われつつ、主として文化的な側面に焦点をあてて研究されることが多かったと考えられる。先に挙げたように、西洋音楽における器楽／声楽の分類は、器楽が道具を用いて楽音をつくりだす音楽に対して、声楽は生身の身体に備わった機能を「操って」「楽音」をつくりだす音楽として受け止められている。さらに例を挙げるならば、言語学、文化論、哲学などにおいて歌う行為がしばしば話す行為と対比されてきた歴史がある。話す行為と同様に言葉を扱う行為として、歌う行為もまたテクストの問題、音声と書き言葉の問題、主体と他者の問題から捉えられてきた。しかし、文化を扱う人文系研究者のこうした態度を批判する意見もある。イーグルトンは、ポストモダンの文化主義において人間がかかわる事象のすべては文化的な問題であるとされてきたことに疑念を表明した上で、人間を文化的なだけの存在と規定し、自然を不活性なものと戯画化してきたのは他ならぬ文化研究者であると述べている（テリー・イーグルトン『文化とは何か』2006 年)。イーグルトンが指摘するように、人文研究者による歌声の扱いが、歌声に対して人々が見出そうとする「自然な」質を「文化的」事実として解釈し、歌声をめぐることがらはいずれも社会的に構築されたものとするものであるならば、その学問的立場は歌声を扱う自然科学研究者のそれとは大きく異なるものになるだろう。

本シンポジウムでは、歌声はまさに、われわれの認識において自然／文化の境界性のはざまで揺れる存在であると位置づけ、これまでもさまざまな分野で議論されてきた自然／文化の対比が歌声研究においてはいかに考えられてきた／考えうるかを検討する。

本シンポジウムは２つのパネルディスカッションから成る。本シンポジウムの構成における特徴として、各パネルに人文学および自然科学の両立場からの発表が含まれている点が挙げられる。これまでも歌声研究における学際的アプローチの必要性が叫ばれていながら、アプローチや立場が大きく異なる研究間での共同研究はあまり実現されてこなかった。その背景には、器楽に対して、声という個別性が高い楽器を扱う歌声研究は自然科学においてアプローチが困難とされ、積極的には研究されてこなかったという事実もあるが、他方ではすでに述べたような自然科学と人文科学との立場の隔たりもあっただろう。歌声研究のそうした問題点を踏まえた上で、各パネルではそれぞれ１名ずつ自然科学的手法の研究者をゲストに迎え、人文学研究者を交えて、個別発表およびディスカッションを行う。2 名のゲストには、各々の研究アプローチの特徴を紹介した上で、歌声研究の現状や研究する際の具体的な難しさについても説明してもらう。

パネルディスカッション１「声とパフォーマンス」では、オペラや音楽演奏のパフォーマンスにおける声の問題がとりあげられる。３名の人文学のパネリストから声のパフォーマンスの特異性にかかわる研究発表が行われたのち、身体運動科学および実験心理学を専門とするゲスト研究者から、発声にかかわる解剖学的知見がすでに蓄積されている一方で、身体運動としての歌声研究が進んでいない現状とその背景にある問題点についての発表が行われる。パネルディスカッション２「声と技術」では、声にかかわる自然科学の「発見」や産業技術の開発が歌声をめぐる文化に与えた影響について考える。２名の人文学のパネリストから研究発表が行われたのち、発声やその教育技術論を専門とするゲスト研究者が、音の放射を視覚化する「音カメラ」の開発と発声教育へのその転用を通じて、これまで声の「響き」として感覚的に捉えられていたものがパソコンの画面上で視覚化され、目に「見える」ようになる技術例を紹介する。

【傍聴記】（中村仁）

今回の例会は「駒場ヴォイス・スタディーズ研究会」のメンバーを中心に、自然科学分野の研究者も招き、二つのパネルディスカッション、総勢7名の報告によって「歌声」を学際的にとらえる試みがなされた。はじめに本シンポジウムのコーディネーターである堀内彩虹氏により、今回のシンポジウムが、「歌声」を「自然」と「文化」の境界線に立ち現れてくる現象としてとらえ、全ての人間の営為を「文化」的な営みとして捉える社会構築主義的な立場を乗り越える試みであると方向づけられた。

『声とパフォーマンス』と題された前半のパネルディスカッションは、新田孝行氏「現代オペラ演出における歌声と人物の関係」、堀内氏「身体的違和感を〈きく〉－歌声聴取の新たなかたち」、子安ゆかり氏「歌手とピアニストのアンサンブルにおける声の相互聴取のメカニズム」、岡野真裕氏「歌声への運動科学的アプローチにおける困難」という4人のパネリストによる報告からなる。まず新田氏がレジー・テアーター以降のオペラ演出における「歌声」の扱いについて論じた。新田氏はオペラにおける「歌声」を、歌手の身体とも、演じられている役柄の身体とも異なる「第三の男/女」として定義し、この「目には見えない仮面のような存在」を舞台上に現前化させる現代オペラ演出の意義と可能性が提示された。堀内氏は「水中オペラ」であるインファンティ《洪水から浮上する人々》(2008)について考察した。聴き手は水中の歌手の口から浮き出る気泡と、絞り出されるような「歌声」を〈きく〉。ここで〈きく〉という営みは、音の生じる事象とその環境を感知することを通じて想起される聴き手自身の身体的記憶(苦しさなど)と結びついた、聴き手の主体的行為となる、と堀内氏は解釈する。子安氏は音楽家としての経験から、伴奏ピアニストによる歌手の「歌声」聴取のメカニズムを子音の役割に注目しながら明らかにする。ピアニストにとって「歌声」における子音は様々な強度とスピードを持ち、母音で拍を合わせる際の重要な手掛かりとなる。子安氏はそうした子音の存在を西洋音楽における「ノイズ」、更には武満徹が論じる「障り」の概念と結びつけ、そののちに生まれる音を自由にするための「障害」として解釈する。行動科学・運動科学を専門とする岡野真裕氏は、「歌声」に使われる筋肉がいずれも体の内側にあり、またその運動も非常に微細なものであるため、モーションキャプチャーや表面筋電図、MRIといった運動科学の代表的な測定方法の使用が困難であり、先行研究もほとんど存在しないことを示した。

後半のパネルディスカッションは『声と技術』と題され、岡野宏氏「機械としての「声帯」－「エオリアン・ハープ」との類比的理解をめぐって」、白井史人氏「歌声の視覚的構成－オペラ・ミュージカル映画におけるその劇的機能」、秋本径人氏「声の視覚化－音カメラを使用した発声の伝播方式の映像化に関する研究」という3人のパネリストの報告からなる。岡野宏氏は西洋近代において、「声帯」がしばしばエオリアン・ハープとの類比で語られることに注目し、そこから人間の「行為」としての歌唱が、直接コントロールし切ることのできない「自己の中の他者」である非身体的な「声帯」に対する、主体の能動性と受動性が交差したところにあると解釈した。白井氏は音と映像の同期という観点から、技術を介した「歌声」と身体の関係を考察する。1930年代アメリカのミュージカル映画においては、本来別々に構成された音と映像の「統合」をめぐる両者の齟齬を逆手に、様々なスペクタクル的表現が行われた。一方、戦後のオペラ映画、特にストローブ/ユイレとジーバーベルクの作品では、スクリーン上の身体の動きと「歌声」の間のズレが、両者の「自然な統合」が仮構であることを暴く批判的な機能を有するという。最後は「米山文明呼吸と発声研究会」の秋本径人氏による「音カメラ」についての報告。2001年に開発された「音カメラ」は5本のマイクと小型カメラにより、映し出された人間の身体の各部位にシャボン玉のような色付きの円を重ね合わせることで、人間の発する「歌声」が、身体のどの部位から、どれくらいの周波数と強さで出ているのかを視覚化する。「歌声」を出す人間が、上下前後も含めた体全体を使って音を震わせている様が視覚的にはっきりとわかる。

コメンテーターの長木誠司氏は7つの報告それぞれに重要な質問を投げかけた。いくつか記しておこう。

堀内氏に対して、主体/客体という二項対立をあえて問題化する意味が問われ、堀内氏により、それがメルロ＝ポンティやフッサールによる現象学的身体論での「物質的身体」と「生きられた身体」という区分を乗り越える視点になりうると説明された。岡野真裕氏に対しては呼吸と内臓筋に対するアプローチ方法についての質問があり、回答の際に岡野氏は、歌い手の感覚的な「わざ言語」と、実際に体内で起こっていることの間のズレ、という重要な問題領域を提示した。岡野宏氏に対しては、エオリアン・ハープがカメラ・オブスキュラのような、身体メカニズムの機械的なモデルとして機能しているのか、という質問があった。岡野氏はそれに対して、「声帯」は機械的モデルというよりも、使い慣れてない杖のようなもので、腕や足の延長のように意志通りに地面に着くのではなく、逆に地面に当てられてしまうような感覚がある、と説明した。フロアからも重要な質問が複数あったが、ここでは一つだけ記しておこう。シンポジウムのタイトルにある「文化/自然」という二項対立の是非についての問いである。堀内氏より、この二項対立は客観的に存在するものではなく、その境界は我々の認識の中に立ち現れてくるものであり、「歌声」を材料に、なぜそうしたものが立ち現れてくるのかを捉えようとしたことがシンポジウムの主旨である、との回答があった。最後に長木氏は、これらの問題がそもそも「リアルな世界」を人文・自然科学がどのような方法で捉えようとしているのか、という問題とつながる、とまとめた。

目には見えない、それでいてはっきりとした身体的リアリティを持って我々に現前する「歌声」は、我々の内にあるのか、それとも外にあるのか?それはモノなのか、それとも主観により構成された現象なのか?今回多くのパネリストが「歌声」を捉える際に問題にしたのは、自然と文化、主体と客体、能動と受動、現実と虚構、自己と他者など、一見自明らしく見える二項対立のどちらにも属さない、それらの狭間、隙間、境界にある不可視の捉えがたきものの存在である(しばしば「中動態」についての言及があった)。必ずしも相互補完的ではなかったパネリストたちの多面的アプローチは、「歌声」という研究対象の一筋縄ではいかぬ捉えがたさと、人間の認識や存在の根源と繋がる問いの豊かさ感じさせ、非常に刺激的であった。

日本音楽学会東日本支部通信　第 46 号

2017 年 10 月 10 日発行
発行：日本音楽学会東日本支部
http://www.musicology-japan.org/east/

日本音楽学会東日本支部事務局
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋 3 丁目 3 番地 3 号生光ビル 303
TEL&FAX：03-3288-5616
E-Mail：higashi@musicology-japan.org